

3 歳児におけるごっこ遊びの発達過程 — 友だちと関わっていく行為を分析して —

藤塚 岳子

要旨

本研究の目的は、3歳児の入園から4ヶ月までの自由遊び場面におけるごっこ遊びに焦点をあて、遊びの仲間入りのプロセスを中心にみてきた。新しい園環境の中で子ども達がどのように遊び場を確保し、物や人と関わり共有テーマを見出していくかとらえていく。ごっこ遊びで子ども達は身体表現による“ふり”を中心にコミュニケーションを成立させていく。ごっこ遊びは役をとり自分のイメージを友だちと共有していくわけであるが、3歳児のこの時期においては簡単に成立するものではないことがわかった。ごっこ遊びが成立するまでの子ども同士の相互行為あり方をみると、「言葉」が契機となり遊びが開始されるとは限らない。同じ場にいる子どもと同じものを持つ、相手の行為をイメージして自分のイメージを作り上げていく。遊び場の確保、遊び行為の連鎖性の現れ方が仲間づくりの大きな要因になっている。このことから3歳児の特に入園当初の段階における友だちと関わっていくプロセスを見ていくと、ごっこ遊びを支える要因のみでは3歳児の発達を読み取ることができない。つまり「相互模倣によるコミュニケーション」「振り向きの意味」「身体知から見た動き」の視点の重要性が明らかになった。

キーワード：ごっこ遊び, 3歳児, 共有テーマ, 身振り,
相互行為

問題と目的

子どもたちは、幼稚園や保育所のような集団生活の中で、様々な活動を行い、その中で仲間とのやりとりをしている（箕輪 2006）。子どもたちはそこで学習的な活動を通して集団で生活していくための社会的スキルを身につけていく。中でも遊びは幼児期における社会性の発達に影響を与える重要な活動としてあげられおり（島田・田中 2012）、子どもにとって、「遊ぶ」という行為がどのような意味を持つのかという根源的な問題を研究テーマにしたものは多く見られる。また、遊びの目的はそれをする事自体が目的であり、「それをする事が面白い」からということ以外に目的はないとも言われている。子どもの遊びの特性は、だれにも強制されない「自発性」にある。そこには遊びに没頭する「熱中性」や展開する仲間との「親密性」がある（横山 2006）。「親密性（intimacy）」とは、ある特定の人や状況に起因するものではなく、相互の働きかけの中から生じる関係の特性である。つまり幼児は遊びを通じた相互作用によって親密性を形成していくと言える。また親密性を深めていくことは仲間関係の形成過程そのもとなる（高櫻 2007）と述べている。

今回は幼児期の代表的な遊びであるごっこ遊びを取り上げる。筆者が幼稚園で勤務している中で実践研究として関心を持ったのが、幼児が自分自身を打ち込んでひたむきに遊んでいるごっこ遊びであった。実践の場において、幼稚園教育要領に示されている「自発活動」が時間的にも、環境としても十分に保障されてい

る場合、子どもが自発的に起こす遊びはごっこの形態をとることが多い。ごっこ遊びは多くの幼児期の子どもが熱心に取り組む遊びである。この遊びは自発的な活動を通して集団生活の中で子どもがどのようなプロセスをたどりながら共有していく仕組みを探った（藤塚 2009）。上記の社会性の発達と共に想像力や創造性、問題解決、認知、思考の発達と深く関連し合っており、重要な遊びとして認識されている。

ごっこ遊びを（玉置 1989）は「ふりをする行為」としてとらえ、その立場から「何のふりをするか（身振り所期）」「何でふりをするか（身振り能記）」「行為としての子どもの身体で表現する行為そのものの中にあられる 2 つの要素の関連づける様式（ふりをする様式）」の 3 つの基本構成要素としている（海野・藤田 2012）。（中沢 1991）はごっこ遊びについて、「たとえば人形を赤ちゃんに見立てて歩き回り、お母さんのお出かけのつもりになる、というように、見立てた物とふり、役割を持つ遊びである」と述べている。「役割」があることをごっこ遊びの要素とすれば「二人以上」の仲間が必要であることを示唆している。つまり、ごっこ遊びとは子どもが見たり、聞いたりした事象・現象を役割、見立てによって一つの一貫したテーマとして作りあげていく遊びである。ごっこ遊びの中での表情、身ぶり、筋の運びに関して、子ども同士の中で共通したルールが必要とされる（横山 2006）。そのために相互交流できるコミュニケーション能力が求められる。

ごっこ遊びは比較的早い段階から経験できる共同遊びである。また、ごっこ遊びでは遊びのイメージを共有する必要があるため、見立てやテーマに関する遊び

のプランをお互いに伝え合うことができなければなら
ない（飯島 2005）。

本研究は、まだ子ども同士の関係が薄い3歳児前期
の段階に絞って、仲間との相互交渉のプロセスやその
ための様々な条件を分析していくことで3歳児のごっ
こ遊びの発達の意義を分析する。3歳児の入園間もな
い時期の新しい環境に子ども達がどのようなコミュニ
ケーションを通してごっこ遊びの中で生じたことを共
有し、相互行為をどのように作り上げていくのかを見
ていく。また、ごっこ遊びでのイメージを共有するた
めの見立てやテーマを相手にどのように働きかけて仲
間入りしていくのかを事例を中心に明らかにしていく。

方法

対象児：常滑市内の保育園3歳児25名，および3歳
児の担任保育者を対象とした。

観察場面及び期間：観察は自由遊びの場面をとりあげ
た。観察期間は、2013年5月17日から7月25日
にかけて計12回であった。時間は朝9時から11時頃
である。

観察方法：保育者が介入しない子ども同士の遊び場
面を原則とした。参与観察を行い、DVD録画し、補
足として記録をとった。

分析方法：録画したすべてのやりとりと一部観察記
録からフィールドノートを作成した。DVDからは発
話や声のトーンや表情などを含め子ども達の行動
の流れや環境を可能なかぎり転記した。それらの
資料から子ども達の相互作用が生じた場面をエ
ピソードとした。

結果と考察

《自分の居場所探しをするといった入園当初を特徴づける姿》

【事例1：2013年5月17日】（DVD記録より）

朝早く登園したA男A子は椅子を並べた（1列5脚4列）1番前列に座っている。頭には保育者が作った帽子をかぶっている。手には新聞紙で作った円をハンドルのように持っている。

他の子はプラットフォーム積木やビニール素材のクッションを床に敷きつめようとしている。①B子とC子は二人で1つのクッションを嬉しそうな表情で運んでいる。敷きつめた上を楽しげに歩いている。その様子をロングドレスをはいたC子が無表情に見ている。D子は保育者と同じうさぎのお面をつけてA男B子が椅子を何列かに並べて乗り物に見立てている椅子の1番後列の端に座っているが交渉はしない。また保育者の近くに行き、周りの子の様子を見ている。B男は両手にヨーグルトの空き容器を持ち黙って保育者の会話や動きを見たり共に動いたりしている。

突然、②A男が後ろにいる子どもたちの方に向かって「3・2・・5・4・3・2・1・0－発車－」と大きな声を張り上げて叫んでいる。一斉に皆（6名）の視線がA男に向けられる。しか他児は乗り込む気配はない。すぐAは前を向き直す。するとA子がハンドルを持ち回そうとする。横に座っているA男の肩をたたくようにして「見てて」と言う。③その気配や動きを感じ取ったのか急に勢いよくハンドルを回して急発進のようにする。二人はキャーキャー楽しみながら二人の世界を楽しんでいる。その楽しそうな気配に吸い込まれるように④B男は一人で二人の前まで来て黙っ

てその様子を見ている。B子は保育者から離れ、乗り物の1番後列の端に座りお客になっている。

しばらく乗りものごっこ以外の遊びはめいめいが物や保育者との関わりを楽しんでいる時間帯が続く。

やがて保育者は、保育者から離れない子達と一緒にA男らの乗り物（椅子をならべたもの）に乗る。A男A子は大声ではしゃぎながら思い切りハンドル（新聞紙で作ったもの）を回す動作をする。他の子ども同士のやり取りはない。A男「早いからー」の言葉を保育者が受け手前の椅子を両手でしっかり押さえようとする恰好をする。一緒にいる子もすかさず同じポーズをとる。A男「もう着いたよー」の声に保育者と一緒にその場から移動する。1人でいろいろなものを触ったり試すような動きをしていて、乗り物の帽子をかぶった⑤C男が急に「お化けー」と言いだす。片足でぴよんぴよん跳ねたり両手を怪獣のように上げて襲うような恰好をして子どもの方に向ける。その振りで一斉に雰囲気が一変する。「私怖くないもん」「怖いー」「きゃー」などめいめいが声を出しながら逃げ始める。保育者と一緒に手をつないだり、体の一部を接触しながら保育室からテラスへと歩いていく。A男の「お化け屋敷」という言葉で子ども達は保育室から北廊下へと行く。「あいつがお化け!!」とC男に向かって指差す。C男はキャーキャー言って逃げる子ども達を怪獣のような仕草で笑いながらゆっくりと襲いかかる恰好をしていく。「こわいよー」と泣きそうなB子は保育者の後ろに捕まっている。他の子は逃げることを楽しんでいる。するとA男「お化けがここに入ってるの」とままごとでつかうプラスチックでできた小さいやかんを持ってくる。「お化けをここに吸い込んでい

いよ」と話をして保育者に渡す。しばらく保育室は C 男と逃げる子どもと一緒に移動が続く。子ども同士の会話はないが嬉しそうな表情で「きゃー」「わー」にげろー」など片言の言葉だけである。⑥ B 男は A 男に「お化けって、そんなことしないよね」と顔がゆるむ感じで初めて自分から言葉を発する。A 男「お化けって、幽霊でしょ。本当は面白い幽霊なんだよ」と言う。保育室の乗り物の椅子に保育者や子ども達が座る。C 男は調子が上がってきて笑いながらお化けのポーズを楽しんでいるようにも見える。「ぎゃーぎゃー。しゅわー」など舌を出しながら言葉にならない音を発している。それを見た A 男が「面白い。これかぶってる（乗り物の帽子）。面白いの」と言って帽子をとる。そのあともしばらく楽しんでいたが A 男の「みんな外に出ようか」の声で外に行く子と 4 歳児のテラスの方に保育者と一緒に逃げていく子とに分かれる。

< 考察 >

①での行為は、入園 1 カ月ということや登園して遊びを模索している時間帯ということもあり、しばらくは一人でプラットフォーム積木を触ったり持ち上げたり周りの子がするのを見たりしている。そのうち、手をつないだり、1 つの物を 2 人で運ぶ等の行為を通して 2 者関係での関わりが開始されていく。このようにいろいろな物や機会を介して、言葉以外に目を合わしたり笑い合ったり表情が 3 歳児の人とのかかわりが成立していくと思われる。（津守 1979）は、「幼稚園の 3 歳児のクラスの入園当初のことである。まだ他の子になじめなくて一人で部屋の片隅に立っている子がいた。そこに他の子が走ってきてぶつかり二人とも倒れ

た．顔を見合わせた瞬間の体験によってその前後では子どもの内的世界が変化していると考えられる」と述べている．このように特に3歳児の入園当初は，発達を考えていくのに客観的行動のみを注視するだけでは子どもの真の姿を見ることがつながらないと思われる．

② A男は言葉によるコミュニケーション能力が発達している子である．A男は周りの子の行動や持っているものに強い関心を示す子である．この日も自分は乗り物（バス？）の運転手になり隣にいるA子と一緒に役をとっている．ごっこ遊びはイメージを友だちと共有し合うことで成り立つ遊びである．イメージを発信し，受信する能力を持ち合わせていなければならないが3歳ではまだ不十分である（二橋・上田 2012）というようにこの場面でも受け手の他児らは反応する行為にでなかった．それは登園して間もない時間帯で，めいめいがウォーミングアップ的な状況であり相手のイメージを共有するゆとりはないと考えられる．ただA男が乗り物ごっこをしている運転手役については把握していると思われる．

③今日のA男とA子の出会いは偶然だと思われる．二人の間で会話が成立して役割を担っている訳ではない．しかし，（箕輪 2006）は，「子どもたちは言葉ではなく身体の動きによっても相手の意図やイメージを読み取ったり，自分の意図やイメージを相手に伝えていたりしていると言える．これらの研究は言葉ではなく子ども達が身体の動きによって他児に意図を伝えたり，他児から情報を受け取っていることを示していると述べている」ようにA子は朝早くからA男の行動を模倣して同じ場にいたんだと思われる．この二人の間ではごっこ遊びが成立している．同じ運転帽子と

ハンドルを持ち、相手と同じしぐさをするこゝでこの短い時間ではあるがごっこ遊びのイメージが共有されたとみなされる。ごっこ遊びで場を共有することは重要な要素である。

④ B 男, B 子はそれぞれまだ特定の友だちがいないので、登園間もないころは一人ひとりがウォーミングアップ的な活動が多い。保育者の近くに居て周りの子どもの様子を見たり自分で移動して確かめたりしている。何気なくぶらぶらしている動きは3歳児の発達の視点からみると意義深い物がある。(瀧川・玉置 2003)が「自己中心的な思考が支配的な3歳児においては、双方向的なコミュニケーションがほとんど見られない」と言われるようにこの場面も先行研究を物語っている。二人の姿を観察していると顔の表情や振り向き先の事物か何に興味や関心を抱いているかを図り知ることができる。

この場合(香曾我部 2010)の3歳児の振り向きの意味で“振り向き”直後の注視、双方向的な“振り向き”によって幼児同士にその後の相互作用に対する暗黙的方略で交渉したり、模倣的方略を用いたりすることで相互作用へと至る過程を明らかにした研究での行為とみなすことができた。振り向き先の対象が2人の乗り物ごっこの場でありそれぞれは黙って自分の中のイメージに向かって行動をとっていると思われる。B男はA男の発車の合図の数を聞いて反応している。言葉で自分の意思を表すことができないが、気になっているA男の遊びを目の前まで行き注視している。何も言わないがごっこ遊びが気になるというよりA男のすることや声などが気にかかる様子である。またB子は固定した友だちはいないので(他の子も大半が同じ状態)、

B男と同じように保育者と同じうさぎのお面をつけ即興的には一瞬は役をとったと思われる。保育者と同じもの（ウサギのお面）を身に付けることで気持ちの安定を図っているのだと考えられる。また乗り物ごっこをしている楽しそうな雰囲気につきつけられて、一人で椅子（乗り物の座席）に座りお客として参加している。ただしA男A子は全く無関心である。以上からもわかるように、3歳児初期の段階の相互行為を見ていると今回の研究であるごっこ遊びが成立する微妙な仲間関係が成立するプロセスを見ていく目的と合致すると考えられる。

⑤突然C男がお化け役になる。ごっこ遊びの相互行為展開の発達の相違については、年少では「行き当たりばったり」にみえたごっこ遊びの展開過程が、年長になるにつれて有機的に関連付けられて脈絡をもつ、すなわち「行為の系統化」（高橋，1991）をもつことが明らかになっている。3歳児の発達特徴から考えてみると（鹿嶋 2004）の研究より年少児は相互主体性の発達が未熟であり、即興的なやりとりは常に相互主体性を維持しつつ展開しているのではないということが言えよう。この場面においても遊び仲間が提案したお化けになりストーリーが行き当たりばったり展開していくことが分かる。ただ、ストーリーといっても3歳児のこの発達段階では共有するレベルではないことが理解できる。

また、（玉置 2007）は「3歳児は役になりきることの面白さに重点が置かれ、4歳児では役になりきることからイメージを拡大し、相手とのイメージとの共有が生まれることによりごっこ遊びの中での関係が生まれ更に作り出す、といった一連の行動が示されてい

ることが明らかにされている」と述べている。このことから、C男のお化けのふりについてはC男自身の動作の格好の面白さがある。片足でぴょんと跳んでみたりまるで怪獣のように手を挙げ襲いかかるような仕草である。その様子を見ているとC男自身が楽しんでるのである。周りの子どもはその格好の面白さに魅力を感じていてお化け屋敷と叫ぶ子もいるが、決してお客役を演じているわけではない。自分自身がお化けという対象になりきり、まず自分がお化けという役にイメージを投影していると考えられる。

(海野・藤田 2012) はごっこ遊びでの身体性は、類似した物や動きから歓喜され、記憶されたイメージから見倣いとして再現されることを指摘している。C男はまさに自分の記憶の中のイメージから子どもなりの身ぶりを工夫したのだと考えられる。また楽しさ自身が伝染していったためお化けと人間という対立構図が可能となった。

⑥ B男は、今日お化けという遊びのイメージが共有されたことがきっかけとなり言葉でA男に自分の思いを伝えることができた。大きな動機はB男がA男に強いあこがれの気持ちを持っているからだと思われる。(高櫻 2009) は、「幼児は一緒に遊ぶ中で主体的に仲間関係を形成する。特に3歳児は大人との関わりを中心としていた関係から同年齢他児との関係へと発達していく時期であり、この時期に同年齢他児と仲間としての関係を築く経験を得ることは、生涯にわたって他者と関わり合いながら生きていく上での基礎となる、そのため遊びと仲間関係の共発達を促進することは、保育実践における重要な課題だ」と述べている。今回の状況をみれば同年齢の子どもに関心を向け始め

た段階の B 男が今後 A 男を始め他児とどのように関わって行くかを見ていくことで今回の研究テーマの発達の意義を知る手がかりとなるだろう。子どもは自分自身が心ゆくまで活動する時にそのときの能力を最善に用いることができ、また自分自身に出合う。そのとき子どもは自己を実現しながら自分自身の個性的な自我つくり上げている（津守 1984）と記している。まさにこの場面はごっこ遊びの意義を語っていると思われる。

《他者に感情を伝える身ぶりを特徴づける姿》

【事例 2：2013 年 5 月 30 日】（DVD 記録より）

ダンボールで作った囲いの中に F 子と T 男がいる。不思議な組み合わせに一瞬驚いた。F 子は枠の中に入っている小型積木をがらがら動かしている。その横にはダンボールの中にままごとコーナーから持ち込んだご馳走（タッパーに入れ込んだ）が入っている。T 男自身もその中に居る。① 1 つの空間（その場で自由に動く広さではない）に 2 人同じ場に居ながら持ち込んだものと触れている様子。一緒に居るがほとんど会話らしいものはない様子である。段ボールに入り込み自分の場で安定しきっている。特に T 男はままごとコーナーに一人で行ったり来たりして色々な物を運んでいる。ご馳走を食べたりケースに入れたりと物をいろいろと触れたり試したりしている。時々相手の動きを見ていたりする。そんな中 D 子が登園してきた。F 子の表情が一変して、まず手を振る。D 子はダンボールの囲いの中にいる F 子に近づいてくる。D 子がダンボールの囲いの家に来ると急に笑顔となり肩をハイタッチする。そして手を振って待っているよというようなぜ

スチャーをする。T男といる時の表情とは余りにも違うと強く感じる。

② D子が持ち物の始末を終えて明るい表情でF子をめがけてやってくる。「仲間に入れてー」と高いトーンの声で言い「ピポーン」とダンボールを押す真似をする。「入っていいですか?」「ピポーン。入っていいですか?」と元気よく言う。すぐ受け容れてもらえるという思いでダンボールを開けようとする。T男は黙ってダンボールをしっかりと捕まえている。「だめー。だめー。」と大声で拒否する。しばらくD子とT男のやり取りが続く。その間、F子は一言も発しないで中にいる。D子はあきらめるようにしながらも、椅子をひっくり返し感情をコントロールしているかのように見えた。

③ そばで絵本を見ていたR子が「ねえ。Oちゃん、見る?」と立ちながら絵本を開いて見せようとする。でも暗い表情のD子は無視してしまう。諦められないD子は再度F子に向かってにっこりして入ろうとする。でもT男はしっかりとダンボールを握りしめて「だめー」の一言である。その後D子は思い切った行動に出る。別の場所から入ろうとするが、また拒否されダンボールを倒してしまう。「だめー」の叫び声でD子は青ざめた表情に変わりその場を離れる。しばらくして別のプラットフォーム積木を積み上げようとしているH子に「入れてー」と言う。二人は顔を見つめあいながら積木を積み上げている。倒れた積木を何回も積み上げまた倒れた積木を積むという繰り返しの遊びを楽しんでいた。

④ D子は「歩く場所」とH子に提案して積木を並べたりする。気持ちは切り替わっているように見える。「チャポーン。チャンポーンドーン」とリズムカルに音を発しながらけらけら笑っている。行

動力のあるD子はやがて「道一」と独り言を言いながら周りを巻き込んで遊んでいく。この場面は互いに笑いを重ね合う中で、積木を積み上げる行動も互いの楽しみが重なりあっていくことがわかった。

< 考察 >

① T男は筆者が今まで観察した姿では、いつも一人でごっこをしていることが多い子どもである。たいていままごとの道具やご馳走などをたくさん持ち込んだり台所の調理台を占領してご馳走の具を使っていることが多い。(高橋 1984)は、「自我と他我の心理的距離という観点から、対人行動のカテゴリーを作成したそのカテゴリーは、1 孤立(独り行動、独り遊び) 2 注目(距離を隔てて他者の行動を見る) 3 接近(他者に近づく、他者のそばで独り遊びをする) 4 接触(他者のそばで同じ行動をする、他者に物を渡す、奪う、話しかける) 5 結合(他者と相互的なかわりをもつ)」と分類している。この分類からみると3の接近と4の接触があげられる。2人は何らかの偶然のきっかけで同じダンボールの空間に入ったのだと思われる。おそらく会話しながら納得し合っただけで同じ場を共有したのではないだろう。無意識の心の感情としては、直接的な態度に出るタイプでないことが逆に引きあうことになったのだろう。子どもが自分の世界を守りながらも特定の相手(友だち)ではない誰かとかかわることかもしれないという気持ちも出てきている。一人ではなく誰かといいたいという気持ちが暗黙のうちに成立したのだろう。3歳未満では幼児一人ひとりの個人的なかわりで、コミュニケーションの成立をはかるが・・・また幼児たち一人一人の集団の中での情緒的

帰属感や安定感はどうかなどを見極め（小川 1990）と説明しているように遊び場を共有することで得られる雰囲気を楽しむ体験をしているとみなしたい。また2人の会話を聞いていても相手に発したものが少ない。ほとんどないといってもいい。言葉の発達が十分でないT男にとって、親しいわけではないF子と偶然ではあるが場を共有できた体験は初めてだと思う。3歳児のごっこ遊びが成立するための条件を改めて考えさせられる場面であった。それは子どものふりの理解やその共有を理解する時、行動面や言葉面から客観的にデータ化することは難しいし内的理解は困難である。数値化できない幼児の微妙な感情体験を捉えていくことやさらに個人的な観察項目を作成していくことが課題として出てきた。

（飯島 2005）の研究より、「ごっこ遊びにおけるテーマの出現からみると、ごっこ遊びのテーマはごっこ遊び開始当初から設定されているわけではない」と言われている。それについて、個人差が著しい3歳児前期の子どもが、どのような要因のもとでテーマが共有されていくかを見ていくことが今回の研究に近づくと思われる。

② D子とF子の関係は登園すると両手でタッチしてスキンシップをし合うほどの関係である。D子は当然一緒に遊べると思って「ピポーン入っていいですか？」と明るいい声で仲間入りしようとしている。F子も同じ気持ちでいたようである。ところが予想外にT男の抵抗にあってしまった。「ダメー」と言うだけで理由も分からないし、3人はお互いに理由を聞いたりすることもしない。同じ繰り返しの状況が続く。会話が成立しないのはなぜなのか。子ども達だけでは仲が良いよ

うに見える．D子とF子の関係なら文句なく遊びが成立したであろう．（高櫻 2009）は幼児が“好き”といった感情や“いつも一緒に遊ぶ”という行動面の認識だけでなく，“この子と同じ気持ちだ”など情動や意図の一致によっても相手との親密性を感じ取っていると思う．この相手の情動や意図を感じ取ることを「間主観性」と言う．広義の情動としての

Vitality affect や身体の動きに基づけられた「あなた」の意図が「いま，ここ」において「あなた」から「私」へと伝わるということである．このことから3歳児のまだ仲間関係が浅い段階では言葉以外の身体表現による行為が大部分を占めるといっていい．保育場面で，遊び以外でのこういった姿は問題にされないと思われる．ごっこ遊びが成立するまでの「親密性」

「間主観性」という観点から見ていくことでごっこ遊びでの仲間関係の分析が変わってくると考えられる．

T男はとにかく「だめー」の一言を何回か繰り返して拒否する．言葉の響きで圧倒されている2人である．この場面で保育者が関わればそれぞれの感情をその子なりの言葉で表出できるのではないかと思われる．3歳児が発達の差を持ちながらも社会的スキルを学び，他児との関係性を捉えるための材料となると思われるし，多様な経験を繰り返しながら相互関係を学んでいく機会となる．遊びの構図という観点でなく仲間に受容する・されるという関係性を見ていく必要がある．

③ R子はなぜこのような行動に出たのか．単なる「かわいそう」という意味でないと思われる．それはT男とD子らのことが生じる前までダンボールの間隙でP子が先生役になり絵本の読み聞かせを聞いていた．動物の絵本で触るように紙面上を手で撫でるようにし

ている．先生役の P 子は丁寧にページをめくりながら R 子の顔を優しい眼差しでみている．R 子は近くで 3 人の状況や言葉を聞いていて D 子への自他感情を「ねえ．〇〇ちゃん見る？」とはっきりと言葉で表現している．（岩田 2012）が、「自他の感情言及がみられた文脈において，3 歳児クラスの幼児においては，ふり遊びとふり以外の遊びに関わらず，遊びの世界が共有遊びの世界が共有されているときにおいて，自他感情への言及がなされていることが特徴だ」と述べている．この場面においては共に遊んでいた関係ではないが，R 子と D 子はごっこ遊びを一緒に遊ぶメンバーである．登園の遅い D 子はいつも遊びが開始された後に参加するパターンとなってしまう．今日も遅く登園するがすかさず D 子の居場所をつきとめ，まず鞆をかけたままで 2 人はスキンシップをする．準備後参加できると思いこんで遊び場に行くが，今日はいつもとは状況が違っていた．思いがけず拒否にあう．何回か参加を試みる姿を R 子は近くで見ている．自分が P 子と絵本を見ていたこともあり，絵本というものを介して D 子に対する感情を言葉では伝えることができず「これ見る？」という関わる言葉が出たと思われる．しかし，D 子は感情的になっているのか見向きもしない状態であった．

④ 仲間入りを拒否された D 子は行動的でイメージを自分なりに相手に表現できる子である．また T 男には受容されないという子どもなりの感情が発したのである．言葉で自己主張できる D 子は先に遊んでいる子どもに対して場を共有するにはあとから登園したという気後れがあったと思われる．集団生活では場を先に確保することがその日の遊びの主導権を握ることにな

ることがある．仲間関係が薄い3歳児前半ではさらに濃厚である．拒否されても泣かないで別の場へと移動したのもその理由だと思われる．感情の立て直しはプラフォーム積木を積んでいる2人の子どもに合わせて真似しながら行動している．高く積んでいる子どもに合わせて同じようにする．高く積んで倒れるということを繰り返す中で笑いが生まれ新しい出会いが生まれた．このあと道づくりとなり別のままごとコーナーを繋ぐ形となりその場がお家ごっこのような遊びへと変化していった．時間経過の中でごっこ遊びの成立を振り返れば理解できることではあるが，ごっこ遊びが成立した後の姿を取り出して発達を見ていくことは真の子どもの発達を捉えることにはならないと思う．

(秋田・増田 2001) はごっこ遊びにおいても外部観察者からは「何々ごっこで何の役割をやっている」と認知される．しかし，行為主体である個々の幼児の側から捉えると，自らが担おうと生成した役あるいは他の友人に呼応して自らが生成する役が，仲間に受容されることによって「役」として初めて成立したと主張している．役が生まれるまでの個々の子どもの相互関係をみることでごっこ遊びの成立の過程を知ることができると思われる．

《自分の安定する場を確保しながら友だちと関わり を特徴づける姿》

【事例3：2013年7月12日】(DVD記録より 9:00～)

以前R子が絵本の衝立の前で先生役をしながらE男やB子と遊んでいた場所にE男一人が入れるダンボールに入っている．中にはクッションやままごとのごちそうや容器が入っている．そこへ①「E男君あそぼ」

と来る。R子はダンボールを運んで来て、E男と同じようにままごとコーナーからご馳走や容器を持ち出して中に入れる。E男はすかさずご馳走をR子に差し出す。次にR子はスプーンにご馳走をのせE男に差し出すとE男は食べる真似をする。受け入れはスムーズにいったようである。D男（さっきまで別の子どもの遊びを見ていた）はプラフォーム積木を1個持ってきて2人の様子を見ている。そこへ②1カ月前では見られない姿（いつも一人で遊んでいて自分から他児へ関わることはあまりない）のT男がままごとコーナーからお弁当の容器にホットケーキのご馳走を2セット持って黙って2人に渡す。D男はもそもそ口を動かしているが言葉が聞き取れない。持ってきたプラフォーム積木をたたく。R子「ここはだめーって」と言いながらE男に食べさせる振りをする。D男は何も言わないですーっとその場を離れていく。R子はダンボールから急に出てままごとコーナーから人形の哺乳瓶を持ってくる。その間にT男はダンボールを持ってきてR子の横に置く。R子は「T君入った・・・」と独り言を言う。2人は拒否することなく同じ場に3人がいる。R子はままごとコーナーに行き、人形を持ってきて2人に渡す。いつの間にか3人のダンボールの横に椅子に座ったA男とB男がいる。ずーと遊びの様子を見ている。R子が何か言葉をおぼろげに聞き取れないとA男は「僕らの方が広いよ。あっちは広いよ。あっちは入れないよ」と少し投げやりの調子で言う。

③突然D男が自分で遊んでいたプラフォーム積木の方を指さして、R子に「滑り台あるよ」と言いに来る。「滑ってみてよ」の声で走っていきすべる真似をする。その後B子が来てR子と何かおしゃべりすると「お魚は

あるよ．赤ちゃんとシート」と言い B 子が渡す．シートを敷き R 子の横に一緒にいる．B 子は R 子の持っているいくつかのバッグを見て欲しいことを伝えている．④ 保育者が通りかかると「R 子はお姉さんだよ」と言う．3 人は少しずつ自分の思いを出しながら場を拠点にしてめいめいで行動していく．

．．．．10:00 頃～．．．．

保育室の後ろ側で保育者と B 子 N 子 E 男 D 男がお家ごっこをしている．隣のプラフォーム積木で構成した場に A 男 B 男が保育者と楽しんでいる光景を見ている．保育者に向かって「先生，雨と地震と雷!!」と大声で叫ぶ．保育者はにっこりうなずいている．嬉しそうに「地震と雷なんだ」と独り言を言う．⑤ 周りの子ども達は意味がわからないため無視している様子．突然「充電池．．買ってくる」と保育者に言って T 男のダンボールのお家に行き「T 君充電池．．」と言いながら籠の中の物を入れている．「充電池とセットする」と言う．A 男は自分の場に戻り「こっちに来てみんな船に乗れば」と大声で言う．でもだれも反応は示さない．「ここに乗れよー」と叫ぶ．また無視される．保育者と一緒にいた E 男が「先生，バスに乗ろうよ」と言いその場から出ていく．

< 考察 >

① 3 歳児の遊び空間を見ていると既設のままごとコーナーで，子どもだけで長くその場において遊びを続けていく姿はあまり見られない．ままごとコーナーは子どもにとって開かれた空間であり，誰でも自由に出入りができるという意味では自分が安定する場ではないからだろう．プラフォーム積木を並べたりしているう

ちに空間ができ、そこでお家ごっこなどが始まったりする。またダンボールで作った衝立や敷物を利用して場ができていく。今回のようにダンボール箱に一人ずつ入りいくつか集まって1つの遊び場が成立している場合がある。この時期になると独りで傍観的に遊びを見ている子はほぼいなくなり子どもなりの方法で自分の遊びや仲間を見つれたりしている。(榎沢 2004)は「ごっこ遊びの空間」はいくらか囲まれているようにしたり、畳やテーブルを置くなどして子ども達が集まって遊びやすいように設定されていることが多い。

「ごっこ遊びの空間」は「物理的に閉じられた空間」を形成しやすい。そして空間の内部と外部を意識させ、内部にいる者と外部にいる者との間に隔たりを生みやすい。子どもたちが感じている空間の「開在性」

「閉鎖性」は物理的な空間形態によるものだけでなく、それ以上に子ども達の身体の中に生じる共同性の程度によると考えられる。それを子ども達は敏感に感じ取り行動しているのであると述べている。まさに今回の研究の課題である。3カ月余りの子ども達のこのメンバーの関わりを追ってみると保育者とのかかわりを持ちつつ自分の遊び場を常に探し確保してきたプロセスを見ることが出来る。登園後子どもたちは自分の居場所探しをしながら他児とかかわっていく術をいろいろと模索しているのではないだろうか。

②事例1で取り上げたT男である。言葉そのものは不明瞭であり言葉の意味が理解できないが、行動的で独り言を言いながら周りの子の気配や様子を通して遊びを繋いできたと思われる。(Lilian G. Katz 2004)は、「会話は相互作用の特別なタイプです。つまり、各参加者の発言の内容は他の子どもの発現とからみあい、

系列的な一連の反応となったと思います。もし発言が系列的にからみあっていなければ並行的な独り言となってしまう」と述べている。T男はまさに言葉の発声が不明瞭であるが以前よりは少しずつではあるが、集団内で独り言を多く言うようになっていく。3歳児前半の子ども達はお互いの相互作用を言葉のみで成立させているわけではないことが明らかである。その子との身体性関わりによる関係性の中で相手を理解しているのだと思われる。

③ D男はR子に対してあこがれの的ないがあるのだろう。うまく言葉が発せられないため一緒に遊ぶことができない。諦めて別の場で遊んでいたが、やはり3人の楽しそうな姿に考えたのであろう。人気のない子が集団に参加することは容易ではない。

(高橋 1984) が「人気のある子どもが上手に参加できるのは、その子の言語的・非言語的能能力が高いからです。つまり集団生活の構造を理解する能力、遊びの進行具合をとらえる能力などが影響している」と述べているように、今のD男とR子の発達段階の差が著しい。でも相手に対する感情が子どもの行動を変化させ次第に社会的スキルを得ていくのだと思われる。

④ この日3人で場を確保してそれぞれの思いで遊びながら部分的にイメージを合わせている様子である。ただ言葉を中心ではなく身ぶりや物の見立てを中心にごっこ遊びをしている。R子と2人では発達の差が大きいにみえる。保育者に対して「私お姉さん」と宣言したのは3人の中で共有のテーマがないということやイメージが曖昧だからでR子にすれば不安定差が生じたのだと思われる。3歳児は相手の行動の筋書きに参加するより自分の行動に相手を引きこむことが多

いと言われていることからわかる。(柴崎 1992)が「例えば、友だち関係が伸びると、言葉の側面も伸びていく。このように、いくつかの側面が相互に関連し合って複合的に伸びていくのが実際の発達である」と述べている。このように発達の差をもち合わせながら子ども達はお互いの状況性やその子の思いも含めて捉えていることが事例からも明らかである。

⑤ A男も事例1に登場した子である。イメージが豊かで言葉もしっかり発言でき行動的でもある。周りの子がイメージなどについていくことができないほどである。A男はR子にもアタックしてみたりするがうまく反応が返ってこない。保育者と楽しそうにお家ごっこをしているのにもうらやましい気持ちが起こったのだと思われる。言葉で「こっちに来てみんなで船に乗ればー」と誘うがこない。おそらくA男に対する子どもの見方はイメージが豊かで一緒にあそんで楽しいと思える半面、一方的に遊びを進めていく行動力についていけないのではないだろうかと考えられる。この時期言葉が仲間入りの大きな条件であるが、子どもの世界は感情的に微妙であることがわかる。言葉以外のコミュニケーションによる事例が多いのはそのためなのだろう。

全体的考察

以上、3歳児の入園間もない時期から4カ月ほどの期間でのごっこ遊びでの事例を挙げ、子どもたちが新しい環境の下で友だちとどのように関わっていくのかを総括的に考察してきた。事例1は、3歳児の入園間もないころの子ども達が言葉を交わさないにもかかわらず遊びが展開していくことである。(瀬野 2010)

が「○○しようよ」といった明示的な提案がないにもかかわらず場が共有されていることが特徴である。

「相互模倣」のよりコミュニケーション的な側面に着目した Nadel は、「相互模倣」は 1 歳半頃より現れ、2 歳半でピークとなり 4 歳頃に消失するという興味深い見解を提起しているというように 3 歳児やりとりの成立は、言語を中心に関わりがもたらされるのではなく、互いに笑ったり、動きや言語を相互に模倣し合うことが基礎になると言われている。入園後 1 か月という段階での子ども達はまず自分の居場所探しに長い時間とエネルギーを費やしている。遊んでいるように見える子ども達の物や人に対する「相互模倣」は言葉によるコミュニケーションより優位にあることに気付いた。それは言葉以外の表情や身ぶりや視線や手にしている物への眼差しが非常に強い。それが 1 か所にいて頭が四方八方に動くことに驚いた。これは DVD 録画をあまり使用しなかった筆者にとって意外性でもあった。子ども達は非常に高い感度で周りの状況を観察していることを物語っている。例えば「お化け」になりきった D 男はたまたまとった役がどの子もイメージが共有しやすいテーマであったためクラスの大半の子どもも巻き込んだ遊びが成立した。これは D 男の魅力ではない。D 男は言葉が豊かでなく擬音語を発して、身ぶりだけが先行したお化けであった。まるで追いかっこごっこのようである。その後このごっこ遊びは展開しなかったことから 3 歳児のこの時期では共有するレベルではないことが証明された。

事例 2 では、先行研究でごっこ遊びが成立するまでの子ども同士の相互交渉のあり方とプロセスを探ることが大切である。それは身振り、見立て、場、役割の

共有の段階を見ることから始まると言われている。この時期の子どもたちを見ているとごっこ遊びを「自我と他我の心理的距離」という観点から対人行動のカテゴリー（高橋）から見ると自分の遊び場をいかに確保するかが重要な問題である。ごっこ遊びにおいても子ども達は自分の居場所づくりのために仲間との相互行為に入っていくという構図が見られる。

そのために子どもたちは、遊びを進めていくという認識よりも感情状態を表す身ぶりを介して遊び場を共有することで得られる雰囲気を楽しむ経験を求めているように考えられる。

事例3では3歳児のごっこ遊びの空間については既設のままごとコーナーを利用することが中心であると（藤塚・2011）はカテゴリー化して、3歳児のこの時期において事例を積み重ねて見ていく必要性を感じ今後の課題でもある。3カ月も経つと子どもなりの社会的スキルを重ね、何となく自分と同じにおいをもつ子やあこがれをもつ子などにかかわっていかうとする。

（無藤 2003）は人は同じ場所において、表情や身ぶり・動作を真似し合うことが人との間の関係の基本だということである。同じ動きをすることは同じ感情を共有することなのであろうと述べているように、自分の空間をもつ大きな動機が相手との相互行為を生みだしていく。それは言葉によるやりとりが成立する以前の集団的独り言を発する時の身ぶりや相手に対する行動様式をみていくことがごっこ遊びが成立する要因を明らかにすることができる。

引用文献

- 1) 箕輪順子（2006）「幼児同士の砂遊びの特徴」一

- ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—
保育学研究第44号第2号 82-92
- 2) 島田友和・田中洋(2012)「遊びの仲間入りにおける需要の要因分析」大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要 No.30 31-40
 - 3) 横山文樹(2006)「ままごと遊びの再考②」—遊びのプロセスからの検証—昭和女子大学初等教育学科子ども教育学科紀要 No788 62-73
 - 4) 高櫻綾子(2007)「3歳児における親密性の形成過程についての事例検討」保育学研究第45巻第1号 23-33
 - 5) 藤塚岳子(2009)「人とかかわる力を育てる援助」—4・5歳児の遊びの共有場面を通して—三重中京大学短期大学部論叢 第47号 63-81
 - 6) 玉置哲淳(1989)「ごっこ遊びの発達段階論(1)」大阪教育大学紀要第iv部門第38巻第1号 29-44
 - 7) 海野摩也子・藤田清澄(2012)「あそびにおける幼児の身振りの様相とその意味」保育学研究第50巻第1号
 - 8) 中沢和子(1991)「第5章 乳幼児の遊びと保育内容」ミネルヴァ書房
 - 9) 横山文樹(2006)前掲「ままごと遊びの再考②」—遊びのプロセスからの検証
 - 10) 飯島典子(2005)「2歳児の母子ごっこ遊び場面における会話の発達的变化」東北大学大学院研究科研究年報第53集第2号 227-237
 - 11) 津守真(1979)「子ども学のはじまり」フレーベル館
 - 12) 二橋香代子・上田敏丈(2012)「ままごとに対する保育者の遊び理解に関する研究」名古屋市立大学

大学院人間文化研究科人間文化研究第18号 85-
95

- 13) 箕輪潤子 (2006) 「幼児の共同遊びに関するレビュー：形態と展開に注目して」東京大学大学院教育学研究科紀要第46巻 269-277
- 14) 瀧川光治・玉置哲淳 (2003) 「保育場面におけるごっこ遊びの関係活動モデルによる分析—一年齢ごとの内的操作・関係面の分析から—」大阪教育大学幼児教育教室第24号 47-66
- 15) 香曾我部琢 (2010) 「遊びにおける幼児の振り向きの意味」保育学研究第48巻第2号 63-73
- 16) 高橋たまき (1991) 遊びと発達, 無藤隆編「子どもの遊びと生活・新児童心理学講座11」金子書房
- 17) 鹿嶋桃子 (2004) 「遊びにおける即興的な相互行為とその分析視座」北海道大学大学院教育学研究科紀要第93号 159-196
- 18) 玉置哲淳・橋本永子・赤木俊之・大内田真理・松浦富貴子 (2008) 「ごっこ遊びにおける子どもの関係と遊びの発展についての分析」大阪教育大学幼君子教育研究室紀要第28号 39-50
- 19) 海野摩也子・藤田清澄 (2012) 前掲「あそびにおける幼児の身振りの様相とその意味」
- 20) 高櫻綾子 (2009) 「3歳児における親密性の形成過程についての事例的検討」保育学研究第45巻第1号
- 21) 津守真 (1984) 「自我の芽生え」岩波書店
- 22) 高橋たまき (1984) 「乳幼児の遊び」新曜社
- 23) 小川博久 (1990) 「3歳児の遊びが育つ」フレーベル館
- 24) 飯島典子 (2005) 「2歳児の母子ごっこ遊び場面に

- おける会話の発達的变化」東北大学大学院教育学研究
年報第53集第2号 227-237
- 25)高櫻綾子(2009)「3歳児における遊びと仲間関係の共発達」発達研究 Vol123 227-237
- 26)岩田美保(2012)「園での仲間遊びにおいて語られる自我の感情」千葉大学教育学部研究紀要第60巻
105-108
- 27)秋田喜代美・増田時枝(2001)「ごっこコーナーにおける役の生成・成立の発達過程」東京大学大学院教育学研究紀要第41巻 349-364
- 28)榎沢良彦(2004)「生きられる保育空間—子どもと保育者の空間体験の解明」学文社
- 29)Lilian Gkt・Sylvia(2004)「子どもの心といきいきとかかわりあう」小田豊監修 奥野正義訳 光生館
- 30)高橋たまき(1984) 前掲「乳幼児の遊び」新曜社
- 31)柴崎正行(1992)「幼児の発達理解と援助」チャイルド本社
- 32)瀬野由衣(2010)「2~3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすか—相互模倣とその変化に着目した縦断的観察—」保育学研究第48巻
第2号
- 33)藤塚岳子(2011)「ごっこ遊びのイメージを支える援助—共有要因の発達プロセスをとらえながら—」愛知教育大学 幼児教育講座 第16号
- 34)無藤隆(2003)「協同するからだことば」金子書房

A Developmental of Symbolic Play in-3-year-old children
—Analyzing children's interaction with their friends—

Takiko FUJITUKA

Abstract

The goal of this research project was to study process by which 3 years olds make friends while playing make believe in the playground during the first four months of preschool. I observed the way that children new to preschool established a place for themselves to play , and how they interact with other establish a common theme to base their make-believe play on. When children play make-believe their communication with one another is mostly grounded in mimicking the movements of whatever they are pretending to be. When children play make believe, they take on a role and demonstrate that role to their playmates. However, I discovered that it is not the simple with 3 years olds. Make-believe play is often initiated by non-verbal cues. The children often start their play by handling the same objects as their playmates, or by observe what the other what children are doing, and base their role in the make believe on that. The place of play and actions of play are factors that affect the child's friend making process. However, it is impossible to understand the child's friend making process by only looking at these factors. It has been made clear that communication through imitating one another, looking back and reflecting on play, and muscle memory are also very important.